



## 関 礼子

- ① 「かかわりの自然空間」
- ② 安田町小松地域の生業と阿賀野川
- ③ 「集落の川」での漁撈形態
- ④ 生業複合からみた河川空間と「かかわり」の重層性
- ⑤ 河川空間の過剰分化と「かかわり」の再構築

### 【論文要旨】

本稿では、人々と自然との多様な「かかわり」が交錯する場を「かかわりの自然空間」と呼び、新潟県阿賀野川流域集落の生業複合を通して人々の行為と河川空間が持つ「かかわり」とその変化について考察する。

阿賀野川はしばしば氾濫し、流路を変えた。阿賀野川は土地を削って新しい流路とし、これまでの流路を新たな土地にする「暴れ川」だった。だが、流域の人々はその曖昧で不安定な空間がもたらす恵みを最大限に利用する生活戦略をとってきた。

本稿では、このような流域集落の生業のあり方に着目し、第一に、生業複合が持つ「在地リスク管理」の特徴、多様な生業の展開を可能にしている河川空間の「かかわり」の重層性について明らかにする。第二に、「かかわり」の重層性が、阿賀野川の曖昧で不安定な性格と相関することを、流域集落の生活文化の多様性、所有感覚の混乱、空間の変化による安定的知識の無効化という3点から論じる。そのうえで、生業や生活文化の変化が、川との「かかわり」を変質させたことを指摘する。